

中学校の友人グループ内における 同調行動についての検討

—関係流動性と自尊感情の影響—

Conformity Behavior of Junior High School Students in their Friends Groups:
Role of Relational Mobility and Self-Esteem

渋澤 智 美

Tomomi SHIBUSAWA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 心理学専攻博士課程前期 2018 年度修了)

青 木 み の り

Minori AOKI

(日本女子大学)

要約

本研究では、思春期における関係流動性と自尊感情が同調行動傾向に与える影響について検討することを目的とした。中学生 413 名を対象に質問紙調査を実施した。階層的重回帰分析の結果、以下のことが明らかになった。①内心から他者の意見や行動を受け入れる内面的同調と、表面的には同調しているように見えて内面では異なる表面的同調とで影響する要因が変化した。②中学生における友人グループの関係流動性が高いほど同調傾向は高かった。その理由として関係流動性が高いことで、グループ成員から外されることへの不安が高まり、同調傾向が高まった可能性が考えられる。対人恐怖心性や拒否不安などの影響が考えられる。③自尊感情が低いほど表面的同調が増加するが、内面的同調は変化しなかった。以上より、同調行動による不適応を防止するために関係流動性への介入が有効であることが示唆された。

[Abstract]

This study investigated the role of relational mobility and self-esteem in the conformity behavior of junior high school students among their friend groups. A questionnaire was administered to 413 students. Hierarchical multiple regression analysis revealed results as follows: (1) Internal conformity (accepting others' opinions and behaviors genuinely) and superficial conformity (seemingly sympathizing) were influenced by different factors. (2) High relational mobility was associated with high conformity. (3) Low self-esteem was associated with high superficial conformity but exhibited no significant relations with internal conformity. Therefore findings suggest that interventions to regulate the relational mobility would be effective in preventing mal-adaptive conformity behaviors.

1. 問題と目的

青年期は友人関係の重要性が特に高まる時期である。それまでの親子中心の関係から離れ、新

しい関係を形成していく段階であり、友人関係が適応に影響することが多くの研究で示されている。大久保(2005)は学校適応に関する研究で、青年期である中高生において、友人との関係、教師との関係、学業を含めた学校生活の要因の中で、友人関係が学校適応に強く影響を与えていることを明らかにしている。この結果は、学校の特徴に関係なくどのような学校においても同じように友人関係が強く影響を与えていることを明らかにしており、友人関係は適応的に過ごすために必要な要素であると考えられる。

保坂・岡村(1986)は、思春期から青年期にかけての友人関係の発達変化を唱えた。その段階は、「1. Gang-group」「2. Chum-group」「3. Peer-group」の順に変化していくというものであり、「Gang-group」は、小学校高学年頃の児童期後半から現れ、その特徴として、外面的な同一行動による一体感をあげている。このグループは、同性の集団で、同じ遊びなどを一緒にすることや集団にのみ適応するルールに従って行動することが特徴だとされている。「Chum-group」は、思春期前半の中学生によく見られ、内面的な類似性や同質性が集団の基盤となっている一方で、異質性を集団から排除することによって維持されるとしている。そのため、いじめが生じやすいのもこの時期だとされている。最後に、「Peer-group」では、高校生以上で見られ、異質性を認め合う、つまり互いの価値化や生き方、理想を知り理解しようとする関係であることが特徴的で、そのため異質者のグループも含まれるとされている。しかし、最近の傾向としては、「Chum-group」の肥大化が指摘され、多くの青年がこの「Chum-group」の段階にいる期間が長く、この段階にとどまり続けているとされる(保坂, 2000)。友人グループに関する他の研究では、五十嵐・廣原(2016)は、中高生男女の9割以上がグループに所属しており、男子よりも女子、特に中学生女子が友人グループは必要であると感じていることを明らかにした。所属理由としては、居心地の良さや支え合えるなどの肯定的な理由だけでなく、孤独回避の傾向もあり、「ぼっち」になることが思春期、青年期における最大の恐怖である(岩宮, 2012)。しかし、一方で女子は友人グループに所属している生徒がしていない生徒よりも、友人グループに対して拒否感を持ち、心的苦痛があることを示唆している(五十嵐・廣原, 2016)。土井(2008)は、対立の回避を最優先にする現代の若者たちの人間関係を「優しい関係」と呼び、相手から反感を買わないように常に心掛けることが学校の日々を生き抜く知恵として強く要求されているとした。また、この「優しい関係」は親密な人間関係が成立する範囲を狭め、他の人間関係への乗り換えを困難にさせるため、一度集団内で対立が生じてしまうと取り返しのつかない決定的ダメージであるように感じられる、としている。

以上のような青年期特有の友人関係を踏まえると、集団内で生き抜くことは何よりも重要なことであると考えられる。そこで、そのような集団の中で排除されず、集団内での葛藤を回避するための方略の1つとして考えられるのが同調行動である。同調行動とは、「自分とは異なる意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義されている(藤原, 2006)。同調には、内心から他者の意見や行動を受け入れる「内面的同調」と、表面的には同調しているように見えるが内面では異なっている「表面的同調」がある。青年期の友人関係の発達段階において「Chum-group」で留まっているならば、同質性を維持するために同調行動は関係性の維持において必要であると考えられる。実際、中学生は高校生や大学生よりも同調的な友人関係を持つことが明らかになっている(落合・佐藤, 1996; 石本ら, 2009)。このように、実際に用いられている同調行動には集団の安定性や適応を促進するといったポジティブな面も報告されているが(戸川, 1956; 榎本,

2003), 一方で, 内心の自己意見との間に葛藤が生じ, ストレスフルな状態を招くこと(坂本, 1999)や, 集団への適応が強調されると過剰に同調行動をしてしまう青年が存在する(葛西・松本, 2010)など個人の精神的健康の面でネガティブな効果も報告されている。よって, 同調行動を行うことは短期的視点では非常に適応的だと考えられるが, 長期的視点では不適応的であると考えられる。

このように適応的な面と不適応的な面が研究されている1つに過剰適応が挙げられる。過剰適応とは、「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすること」と定義され(石津・安保, 2008), 日本で進められている過剰適応研究においては, 対人関係上の行き過ぎた適応として捉えられる場合が多い(益子, 2009)。石津(2006)の青年期前期用の過剰適応尺度では, 「自己抑制」「自己不全感」「他者配慮」「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」の5つの下位尺度が設定されており, 同調行動の中の表面的同調は, 自分の本来の考えを抑制して周囲に合わせるという意味では「自己抑制」に当てはまると考えられる。渡邊(2016)は大学生・院生を対象として, 環境要因である関係流動性とパーソナリティ要因である性格特性の両方が過剰適応に直接的, または間接的に影響を与えていること, 中でも関係流動性よりも性格特性の方が強く影響していることを明らかにした。この研究から, 変化可能性が低く介入の難しい性格特性よりも, 影響力は小さくとも環境調整など, 介入が比較的容易な視点で過剰適応について検討する重要性が示唆された。他にも, ある傾向を2つの側面から研究することで, その傾向の全体をとらえやすくなると考えられ, 本研究においても, 環境要因と個人内要因の2側面から同調行動傾向について検討したい。

まず環境要因として, 渡邊(2016)の研究同様関係流動性に注目する。関係流動性とは, Yuki et al.(2007)によって「ある社会において, 必要に応じて新しいパートナーと関係を結ぶことが出来る機会の多さ」と定義されている。関係流動性が高いほど新しいパートナーと関係を結ぶことが出来る機会の多いため, 非常に開放的で自由度が高いと考えられる。反対に関係流動性が低いほど自由に新たな人々と関係を形成することが難しくなり, 閉鎖的な集団になっていると考えられる。関係流動性を海外で比較すると, 日本は新たに対人関係を結ぶことが困難な閉ざされた社会であり, 集団から排斥されるコストが大きいと指摘したうえで, 日本人は他者の反応を気にしつつ自らの選好とは異なる行動をとっているとしている(Hashimoto & Yamagishi, 2015)。このように, 閉鎖的な社会になりやすく他者の反応に敏感な日本において, 同調行動を考える上で環境要因の影響は欠かせないものであると考えられる。また, 渡邊(2016)の研究は大学生と大学院生を対象として行ったものであるが, 単位制による授業の形態やサークル, バイトなど比較的自由度の高い大学生と比較すると, 自由度の少ない中学生時代の学校内におけるコミュニティは少ないため, 改めて中学生を取り巻く環境を考えることは非常に重要であると考えられる。関係流動性が高い, つまり友人グループ環境の自由度が高ければ, 例え現在の集団でうまくいかなかったとしても他集団に移動することが出来るという安心感から, 同調傾向や他人に過剰に合わせることは少ないと考えられる。一方で, 関係流動性が低い, つまり友人グループ環境の自由度が低く固定的であれば, 悪い評価を受けないように波風をたてないように意図するため, 同調傾向は高いと考えられる。

次に, 個人内要因として自尊感情に注目したい。自尊感情とは, Rosenberg(1965)の「1つの特

殊な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的な態度」で、自己についての価値的な感情のことである。山田(2017)は自尊感情と、異質な存在に見られることに対する不安である、被異質視不安の関連を検討し、自尊感情が高いほどその不安が低いことを明らかにした。同質性を求める「Chum-group」段階の中で、友人と異なる意見や考えを持つことで異質な存在としてみられないように、同調行動をとることが考えられる。また、小松(2005)は、自尊感情が高いほど他者との関係や役割に対する過度な依存がないと述べている。ゆえに、自尊感情が高い、つまり自身に対して肯定的であれば、他人との関係性に敏感になることも少なく、自己表出もしやすいと考えられ、同調傾向は低いと考えられる。一方で、自尊感情が低い、つまり自身に対して否定的であると、他者の関係性に敏感になったり、依存的になったりすることで同調傾向が高いことが考えられる。

以上のことから本研究では、青年期の中でも特に同調行動傾向が高いとされる中学生を対象に、中学生の友人グループの環境と個人内特性が同調行動傾向にどのように影響を与えているかを検討することを目的とし、以下の仮説をたてた。

1. 関係流動性が高いほど、同調行動傾向は低い。
2. 自尊感情が高いほど、同調行動傾向は低い。
3. 関係流動性、自尊感情共に単体の効果のみでなく交互作用として同調行動傾向に影響を与えている。

実際の学校生活における中学生の同調傾向を環境と特性の面から調査することで、実際の現場における同調行動傾向による不適応に対する介入など、中学生の支援のための知見を得ることができると考える。

2. 方法

2-1. 調査対象者

2018年9月中旬から10月の期間において、神奈川県のア中学校の中学生を対象に質問紙を配布し、445部回収した。そのうち、回答に欠損が見られた32名の回答を除いた413名を分析の対象とした。分析対象者の内訳は1年男子61名、1年女子67名、2年男子64名、2年女子82名、3年男子66名、3年女子73名であった。

2-2. 調査内容

使用した質問紙は、表紙を含めた4ページから構成された。表紙には、質問紙に関する簡単な説明文を明記し、2ページ目より性別、学年を問うフェイスシート項目、関係流動性を測定する尺度、自尊感情を測定する尺度、同調行動傾向を測定する尺度から構成された。

(1) 関係流動性を測定する尺度

環境要因を測定するための尺度として、Yuki et al.(2007)によって作成された、関係流動性尺度12項目を用いた。「新規出会いの機会」と「関係形成・解消の自由度」の2因子からなる。この尺度は大学生を対象として作成されたものであるが、A中学校関係者より本研究の対象である中学生には質問項目内容が難しい、表現が硬いため分かりにくいのではとの指摘があったため、本来

の質問項目の表現方法を修正し、学校関係者に許可を得たうえで使用した(例:「彼らはどの集団や組織に所属するかを自分の好みで選ぶことが出来る。」→「あなたの学校の友人の多くは、どのグループに入るかを自分の好きなように選ぶことが出来る。」など)。また、本研究では、学校における友人グループの流動性の測定を目的としているため、本来の教示文において「あなたの身近な社会(学校、職場、住んでいる町、近隣など)に住む人々についてお尋ねします」という箇所を「あなたの学校の友人についてお尋ねします」と変更し、また質問項目内の「集団」を「友人グループ」と変更して使用した。評定は、「1. 当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. やや当てはまる」「4. 当てはまる」の4件法で回答を求めた。

(2) 自尊感情を測定する尺度

個人要因を測定するための尺度として、桜井(2000)によって作成された、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度の日本語版を用いた。本来は10項目であるが、学校関係者より否定的な表現を避けてほしいとの指摘があったため「私は自分がだめな人間だと思う」、「私は自分が役立たずだと感じる」、「自分を失敗者だと思いがちである」の項目を削除、また「私には得意に思うことがない」という項目を「私には得意に思うことがある」という表現に変更し、計7項目を使用した。「自分について、最も当てはまる数字に○をつけてください」という教示のもと、関係流動性尺度と同様の4件法の選択肢で回答を求めた。

(3) 同調行動傾向を測定する尺度

同調行動傾向を測定するための尺度として、葛西・松本(2010)によって作成された、同調行動尺度を用いた。本来は、「仲間への同調」因子と「自己犠牲・追従」因子の計24項目であるが、学校関係者より質問項目数が多いことによる生徒への負担に関する指摘があり、項目数を減らして使用した。本研究では、因子負荷量.55以上を基準としてそれ以下の項目を削除、最終的に「仲間への同調」因子5項目、「自己犠牲・追従」因子6項目の、計11項目を採用した。「自分について、最も当てはまる数字に○をつけてください」という教示のもと、関係流動性尺度と同様の4件法の選択肢で回答を求めた。

(4) 実施手続き及び倫理的配慮

調査は、各学級担任に質問紙の配布・回収・生徒への教示を依頼した。教示の内容としては、回答を拒否できることや回答を中断出来ること、成績には一切関係ないことを口頭で依頼し、表紙にも「回答には正解不正解はなく考え込まずに回答してください」と明記した。また、倫理的配慮として、回答は無記名で行い、回収した質問紙を封筒に入れ、封をして提出をしてもらうことで、個人が特定されることのないようにした。

2-3. 分析ツール

収集したデータをもとに分析を行うために、IBM SPSS Statistics ver.24、IBM SPSS Amosを使用した。

3. 結果

3-1. 関係流動性尺度項目の確認的因子分析と信頼性、記述統計

本研究では、先行研究の質問項目から中学生を対象として項目表現を変更した。そのため、想定通りの2因子構造となることを確かめるために、逆転項目の処理を行った後で、Amosを用いた確認的因子分析を行った。2つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2 = 468.05$, $df = 53$, $p < .001$, $GFI = .809$, $AGFI = .718$, $RMSEA = .138$, $AIC = 518.05$ であった。また、因子負荷量の値が.35以下となり非常に低い負荷量となったため、その項目を削除して再度分析を行った。因子負荷量の値が.35より低い値を削除し、規定の因子負荷量以上の項目が残るようにモデルの検討を繰り返し行ったところ、適合度指標は $\chi^2 = 27.05$, $df = 13$, $p < .05$, $GFI = .982$, $AGFI = .961$, $RMSEA = .051$, $AIC = 57.05$ と、最初のモデルよりもデータに適合した結果が得られた。Table1に、この最終的なモデルの分析結果を示す。

Table1 関係流動性尺度の確認的因子分析結果（標準化推定値）

	I	II
1. あなたの学校の友人の多くには 人々と新しく知り合いになる機会がたくさんある。	.74	
2. あなたの学校の友人の多くは、 初対面の人と会話を交わすことがよくある。	.73	
5. あなたの学校の友人の多くが、 新しい人たちと出会うのは簡単なことだ。	.60	
*8. あなたの学校の友人の多くは、 付き合う相手を自由に選べないことが多い。		.58
*9. あなたの学校の友人の多くは、現在いる友人グループ に満足していても、そのグループに居続けると思う。		.55
*11. あなたの学校の友人の多くは、現在の友人関係に満 足していても、多くの場合そのままにいるしかない。		.86
*12. あなたの学校の友人の多くは、たとえ現在いる友人 グループを抜きたいと抜きたいと思っても、そのグループ にとどまるしかないことが多い。		.84
因子間相関		.14

*逆転項目

I：新規出合いの機会

II：関係形成・解消の自由度

$\chi^2 = 27.05$, $df = 13$, $p < .05$, $GFI = .982$, $AGFI = .961$, $RMSEA = .051$, $AIC = 57.05$

分析の結果得られた尺度の信頼性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、「新規出合いの機会」は $\alpha = .72$ 、「関係形成・解消の自由度」は $\alpha = .78$ であり、内的一貫性が確認された。そのため、本研究ではこの結果に基づいた分析を行うこととする。

また、データ全体のそれぞれの尺度の記述統計をTable2に示す。

Table2 各尺度の記述統計結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M in</i>	<i>M ax</i>
新規出会いの機会	8.95	1.91	3.00	12.00
関係形成・解消の自由度	8.91	2.58	4.00	16.00
自尊感情	17.86	3.99	7.00	28.00
仲間への同調	11.23	3.69	5.00	20.00
自己犠牲・追従	16.35	3.63	6.00	24.00

3-2. 2要因分散分析

性別と学年差の検討のために、学年(1年・2年・3年)と性別(男子・女子)を独立変数とし、それぞれの下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果、「新規出会いの機会」では、学年の主効果が認められ($F(2, 407)=7.55, p<.01$)、Tukey法による多重比較の結果、1年生が2年生よりも有意に高い得点を示していた。「関係形成・解消の自由度」では、学年の主効果と交互作用が認められた。下位検定として単純主効果の検定を行った。性別における学年の単純主効果の検定では、男子のみ有意であった($F(2, 407)=6.14, p<.01$)。各学年における性の単純主効果を検定した結果、1年生のみ有意であった($F(1, 407)=4.52, p<.05$)。「自尊感情」では、学年の主効果が認められ($F(2, 407)=7.93, p<.001$)、Tukey法による多重比較の結果、1年生が2年生、3年生よりも有意に高い得点を示していた。また、性別の主効果が認められ($F(1, 407)=5.98, p<.05$)、男子が女子よりも有意に高い得点を示していた。「仲間への同調」では、性別の主効果が認められ($F(1, 407)=6.66, p<.05$)、女子が男子よりも有意に高い得点を示していた。「自己犠牲・追従」では、群間に有意な差は見られなかった(Table3, 4)。

Table3 各尺度の学年別・性別の記述統計結果

	男子			女子		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年
	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>
新規出会いの機会	9.41 (2.25)	8.94 (1.60)	9.03 (1.87)	9.46 (1.75)	8.17 (1.90)	8.90 (1.80)
関係形成・解消の自由度	7.92 (2.63)	9.08 (2.18)	9.45 (3.02)	8.88 (2.87)	9.12 (2.12)	8.86 (2.47)
自尊感情	19.84 (4.01)	18.08 (3.61)	17.30 (4.54)	18.24 (3.63)	16.76 (3.77)	17.40 (3.70)
仲間への同調	10.26 (3.53)	11.22 (3.30)	10.68 (4.10)	11.75 (4.43)	12.11 (3.37)	11.11 (3.12)
自己犠牲・追従	15.97 (3.61)	16.13 (3.24)	16.36 (4.04)	16.34 (3.61)	17.4 (3.70)	15.86 (3.43)

Table4 学年別と性別による2要因分散分析結果

	学年間	性別間	交互作用	多重比較
新規出会いの機会	7.55**	2.30	1.84	2<1
関係形成・解消の自由度	3.59*	.30	3.09*	
自尊感情	7.93***	5.98*	1.85	2,3<1
仲間への同調	1.82	6.66*	.69	
自己犠牲・追従	1.08	.86	1.76	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3-3. 相関分析

それぞれの尺度間で関係が見られるかどうかを調べるために、相関分析を行った。その結果をTable5に示す。データ全体での相関分析の結果、「新規出会いの機会」と「自尊感情」の間に弱い正の相関が見られた($r=.27$, $p<.001$)。

Table5 それぞれの尺度の相関係数

	1	2	3	4
1 新規出会いの機会	—			
2 関係形成・解消の自由度	-.10*	—		
3 自尊感情	.27***	-.13**	—	
4 仲間への同調	.09	.15**	.07	—
5 自己犠牲・追従	.06	.19***	-.13**	.36**

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

次に、性別による相関分析を行った結果(Table6), 男女どちらとも「新規出会いの機会」と「自尊感情」の間に弱い正の相関が見られた(男子: $r=.34$, $p<.001$, 女子: $r=.20$, $p<.01$)。また、男子においては「関係形成・解消の自由度」と「仲間への同調」($r=.34$, $p<.001$), 「関係形成・解消の自由度」と「自己犠牲・追従」($r=.26$, $p<.001$)の間に、弱い正の相関が見られた。一方で、女子において「関係形成・解消の自由度」と「仲間への同調」, 「関係形成・解消の自由度」と「自己犠牲・追従」の間に有意な相関は見られなかった。また、男子においては「自尊感情」と「自己犠牲・追従」の間に有意な相関は見られなかったが、女子において弱い負の相関が見られた($r=-.22$, $p<.01$)。

Table6 男女別尺度の相関係数

	1	2	3	4	5
1 新規出会いの機会	—	-.20**	.20**	.11	.02
2 関係形成・解消の自由度	.01	—	-.16*	-.03	.12
3 自尊感情	.34***	-.10	—	.06	-.22**
4 仲間への同調	.10	.34***	.12	—	.31***
5 自己犠牲・追従	.12	.26***	-.03	.40***	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

※左下：男子, 右上：女子

次に、学年別の相関分析を行った結果(Table7, 8), 3年において「新規出会いの機会」と「自尊感情」の間に有意な相関は見られなかったが、1年($r=.29$, $p<.01$), 2年($r=.32$, $p<.001$)において弱い正の相関が見られた。また、1年生において「自尊感情」と「仲間への同調」の間に有意な相関は見られなかったが、2年($r=.32$, $p<.001$), 3年($r=.21$, $p<.05$)において弱い正の相関が見られた。他の学年に見られなかったものとしては、1年の「関係形成・解消の自由度」と「自尊感情」の間に弱い負の相関が見られた($r=-.22$, $p<.01$)。

Table7 学年別尺度の相関係数

	1	2	3	4	5
1 新規出会いの機会	—	-.23**	.32***	.06	-.03
2 関係形成・解消の自由度	-.13	—	-.08	.11	.08
3 自尊感情	.29**	-.22*	—	.32***	-.08
4 仲間への同調	.09	.16	-.07	—	.27**
5 自己犠牲・追従	.16	.21*	-.19*	.43***	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

※左下：1年, 右上：2年

Table8 学年別尺度の相関係数

	1	2	3	4	5
1 新規出会いの機会	—				
2 関係形成・解消の自由度	.10	—			
3 自尊感情	.15	-.04	—		
4 仲間への同調	.18*	.18*	.21*	—	
5 自己犠牲・追従	.11	.24**	-.04	.36***	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

※左下：3年

3-4. 階層的重回帰分析

最後に、関係流動性尺度の因子である「新規出会いの機会」と「関係形成・解消の自由度」と「自尊感情」が同調行動傾向に及ぼす影響について検討するため、階層的重回帰分析を行った。結果をTable9に示す。従属変数には「仲間への同調」と「自己犠牲・追従」を、独立変数には、Step1に「新規出会いの機会」、「関係形成・解消の自由度」、「自尊感情」を投入した。Step2にはそれぞれの交互作用項である「新規出会いの機会×自尊感情」、「関係形成・解消の自由度×自尊感情」、「新規出会いの機会×関係形成・解消の自由度」を投入し、Step3には3つの交互作用項「新規出会いの機会×関係形成・解消の自由度×自尊感情」を投入した(Table6)。なお、独立変数の得点は標準化得点を使用した。

階層的重回帰分析の結果、Step1では「仲間への同調」が従属変数のとき、「関係形成・解消の自由度」($\beta=.17$, $R^2=.04$, $p<.01$)が有意となり、「自己犠牲・追従」が従属変数のとき、「新規出会いの機会」($\beta=.12$)「関係形成・解消の自由度」($\beta=.18$)「自尊感情」($\beta=.14$)のいずれの変数も有意であった($R^2=.06$, $p<.001$)。しかし、Step2, Step3において、説明率は低下し、有意でなかった。

Table9 同調行動傾向を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

		仲間への同調			自己犠牲・追従		
		β	R^2	ΔR^2	β	R^2	ΔR^2
Step1	新規出会いの機会	.09	.04	.04 **	.12 *	.06	.06 ***
	関係形成・解消の自由度	.17 **			.18 ***		
	自尊感情	.07			-.14 **		
Step2	新規出会いの機会	.10 *	.05	.01	.13 **	.07	.01
	関係形成・解消の自由度	.15 **			.16 **		
	自尊感情	.06			-.14 **		
	新規×自尊	.01			.01		
	関係×自尊	.10			.05		
	新規×関係	.05			.08		
Step3	新規出会いの機会	.10	.06	.00	.14 **	.07	.00
	関係形成・解消の自由度	.17 **			.16 **		
	自尊感情	.06			-.14 **		
	新規×自尊	.01			.14		
	関係×自尊	.11 *			.85		
	新規×関係	.04			1.56		
	新規×関係×自尊	-.04			.02		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 考察

4-1. 因子

本研究では中学生を対象として質問項目の表現を変更したため、確認的因子分析を行い想定因子構造となるか確認を行った。その結果、先行研究と因子の構造は変化した。具体的には「新規出会いの機会」因子で、「3.あなたの学校の友人の多くには、新しい友人を見つける機会があまりない。」、「4.あなたの学校の友人の多くが、見知らぬ人と会話することはあまりない。」の2項目が削除、「関係形成・解消の自由度」因子で「6.あなたの学校の友人の多くは、ふだんどんな人たちと付き合うかについて、自分の好きなように選ぶことができる。」、「7.あなたの学校の友人の多くは、もし現在いる友人グループに不満があれば、新しい友人グループに入ると思う。」、「10.あなたの学校の友人の多くは、どのグループに入るかを自分の好きなように選ぶことができる。」の3項目が削除された。この結果は、因子の中でも肯定的な項目内容と否定的な項目内容に区分されたといえる。これは、大学生を対象としていた先行研究と比較して、本研究では中学生を対象としたことが影響している可能性がある。福留ら(2017)は自尊感情尺度において、逆転項目群から構成される因子(NSE)と順項目群から構成される因子(PSE)の相関関係は若年層ほど低い値を示す傾向があり、発達の影響を受ける可能性を示唆している。また福留・森永(2018)は尺度を自己評価的尺度へと一般化し研究を行った結果、同様に肯定・否定表現による方法因子が存在することを示し、方法因子が自己評価的尺度一般に存在する可能性を示唆した。本研究でも、年齢が低かったことが肯定的内容と否定的内容に区分した結果につながったと考えられる。また今回使用した尺度は、自己評価式的のものではなく「あなたの学校の友人の多くは」という主語のもと友人グループに対する評価尺度であるが、集団の基盤が内面的な類似性や同質性となっている

Chum-group (保坂・岡村, 1986)の段階にいる中学生においては、集団に対する評価も自己への評価と同じ枠組みとして捉えられ、このような結果になったのではと考えられる。

4-2. 性差, 学年差

学年と性別による違いを検討するために、学年と性別を独立変数、それぞれの下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果、学年の主効果が見られたのは「新規出会いの機会」で1年生が2年生よりも有意に高い、「自尊感情」で1年生が2年生、3年生よりも有意に高いという結果となった。「新規出会いの機会」で1年生が有意に高い結果となったことについて、本調査が4月入学から約半年後の調査であったため、学校生活の期間の長短が影響したことが考えられる。自尊感情に関しては、中学入学時の1年生が最も高く、学年が上がるにしたがって自尊感情が低下するという先行研究の結果(古荘, 2009; 加藤・太田・松下・三井, 2018)と一致している。その理由として、第二性徴に伴う容姿の変化や受容などの身体的要因(村瀬, 1995)や思考の発達(加藤他, 2018)など様々な要因が示唆されている。一方で、性別の主効果が見られたのは「自尊感情」で男子が女子よりも有意に高く、「仲間への同調」で女子が男子よりも有意に高い結果となった。いずれも、先行研究の結果と一致した結果となっていた。学年と性別の交互作用が見られたのは「関係形成・解消の自由度」のみであり、単純主効果の検定の結果、1年生において男子よりも女子の方が関係形成・解消の自由度が高くなり、男子において1年生よりも2年生、3年生の方が関係形成・解消の自由度が高くなることが分かった。この結果は、女子の方が男子に比べて閉鎖的なグループを持つとする研究(塚本・濱口, 2003; 餅川, 2011)と異なる結果となった。しかし、これが入学後約半年しか経過していない1年生にのみみられた結果であることを考えると、1年生にとってこの時期は、自分に合った友人グループに所属するための準備段階であり、お試し期間として様々な人との関わりを持っている期間だったのではないかと考えられる。また、男子は、学校生活を送る中でクラス替えや様々な関係形成、解消の機会などを経験することにより、女子と比べてグループの形成、解消が比較的自由に行えるようになっていることが考えられる。

4-3. それぞれの主効果と交互作用

最後に、関係流動性尺度の因子である「新規出会いの機会」と「関係形成・解消の自由度」と「自尊感情」が同調行動傾向に及ぼす影響について検討するため、階層的重回帰分析を行った。その結果、それぞれ β の値は低いが、「仲間への同調」が従属変数のとき「関係形成・解消の自由度」が正の影響力、「自己犠牲・追従」が従属変数のとき、「新規出会いの機会」「関係形成・解消の自由度」が正の影響力、「自尊感情」が負の影響力を持つことが明らかになった。同調行動傾向の中でも、内心から他者の意見や行動を受け入れる「仲間への同調」(以下、内面的同調)と、表面的には同調しているように見えて内面では異なる「自己犠牲・追従」(以下、表面的同調)とで影響する要因が変化するという結果となった。まず同調行動傾向と環境要因の関係では、友人グループの形成や解消の自由度が高いほど、内面的同調も表面的同調も増加すること、加えて他者との出会いの機会が多くあるほど表面的同調が増加することが明らかとなった。つまり、中学生における友人グループの流動性が高いほど同調傾向は高くなるという結果となった。本研究では、関係

流動性が高いことによって、現在の集団で失敗しても他集団に移動することが出来るとの安心感から同調傾向は低いとの仮説を立てており、流動性が高いことによる肯定的な効果を予想していたが、関係流動性の高さと同調傾向の間には仮説とは異なる認知が働いている可能性が考えられる。次に、同調行動傾向と個人内要因の関係では、自尊感情が低いほど表面的同調が増加することが明らかになった。相関分析では、男子と比べて女子の方が有意な正の相関が見られた。これは、山田(2017)や小松(2005)の結果を支持する形となった。よって、自尊感情が低く自身に対して否定的であると、他者との関係性に敏感になりグループ内での関係性を維持するために同調行動が使用されると考えられる。本研究では、関係流動性と自尊感情の交互作用は見られず、同調行動傾向にはそれぞれ独立して影響を与えていることが明らかとなった。また、内面的同調への自尊感情の影響は見られず、表面的同調への影響力は関係流動性がわずかな差ではあるものの、自尊感情より大きいという結果となった。これは、大学生・院生を対象として、環境要因よりも性格特性の方が大きな影響力を持つことを明らかにした渡邊(2006)の結果と異なる。ゆえに、中学生時期において同調行動を検討する上では個人内要因よりも環境要因が重要である可能性が考えられる。榎本(2003)は青年期の友人関係が、高校生を境として同質性を重視した関係から異質性を重視した関係へ移行することを明らかにしている。このような関係性の変化が、中学生と大学生にとっての環境の重要性の違いに表れたと考えられる。また高坂(2009)は、自我の形成が不十分な中学生においては自分自身について十分に内省することが出来ないが、高校生から徐々に内省が可能となることを明らかにした。ゆえに、中学生時期の自己の不安定さも、本研究では環境要因に比べて影響力が小さいという結果の要因の1つとなったのではないかと考えられる。

4-4. 仮説の検証

本研究の目的は、以下の仮説を検証することであった。

1. 関係流動性が高いほど、同調行動傾向は低い。
2. 自尊感情が高いほど、同調行動傾向は低い。
3. 関係流動性、自尊感情共に単体の効果のみでなく交互作用として同調行動傾向に影響を与えている。

仮説1については、支持されなかった。仮説とは反対に、関係流動性が高いほど同調行動傾向は高いという結果となった。上記で、関係流動性と同調行動傾向を媒介する要因の可能性を示唆したが、考えられる要因としては対人恐怖心性や拒否不安が挙げられる。本田・梶原・堀川・森・一期崎(2013)は、中学生を対象として同調行動と対人恐怖心性の関連があることを明らかにし、田島・山崎・岩瀧(2015)は大学生を対象として対人欲求(賞賛・非拒否・回避の3つ)と同調行動の関連を検討し、拒否されたくない思いが強い者や他者との関係を回避する者の方が、自己を犠牲にして積極的に周囲に同調する傾向が高いことを明らかにしている。これらの研究から、友人グループの流動性が高いが故に、すぐ関係を切ることの出来る存在として、友人グループの成員から外されてしまうのではないかという否定的な認知が働いた可能性が考えられる。石田・丹村(2012)によると、学級内で形成される仲間集団の集団内では高い親密性を持ちながら、集団外の成員に対しては閉鎖的、排他的であること、またこのような集団は一度形成されると固定化され、離脱が難しい。よって、中学生にとって所属する友人グループの存在は絶対的で、いかにそこか

ら外れないかについての意識が高まり、それが危うい環境に置かれることで反対に対人恐怖や拒否不安が刺激されるのかもしれない。

仮説2については、半分支持された。同調行動傾向の中でも内面的同調は自尊感情による影響は認められなかったが、自尊感情が表面的同調に影響を与えていることが明らかになった。表面的同調とは、同調しているように見えて内面では異なる、つまり本当は違う意見や考えを持っているにも関わらず、周囲に同調してしまうことを指すが、これはほぼ自己抑制とほぼ同義であると考えられる。一方、過剰適応もその概念構造が「外的適応の過剰さ」と「内的適応の低下」の2側面から構成されており、石津・安保(2008)は更にその「内的適応の低下」の下位カテゴリとして自己抑制をあげている。よって、表面的同調は過剰適応の「内的適応の低下」の分類に含めてよいと考えられる。加えて、他の過剰適応研究ではその内的適応の指標として、「自分の言ったことやしたこと自信が無い」や「自分には、あまりよいところがないと思う」など、「自尊感情の低さ」に相当する内容が多く用いられてきた(益子, 2013)。ゆえに、自尊感情の低さと表面的同調は関係が深いと考えられる。本研究において相関は有意とはならなかったが、自尊感情の低さが同調行動傾向に影響を与えていることが明らかとなり、自分への自信のなさから、自分の意見や考えにも自信が持てず、他者に合わせてしまうと考えられる。一方、内面的同調は、内心から他者の意見や行動を受け入れる同調のことであるがこちらの同調の影響が見られなかった理由として、この同調が中学生にとって「同調」として受け取られなかった可能性が考えられる。つまり、その行動が他者の意見や行動に合わせたものではなく、自分で意識的に選択した結果であるという認知が働いているのかもしれない。伊藤・小玉(2005)は、自尊感情と自律性(日常の些末な問題から人生の進路に関わる重要な問題まで、自分の判断により自分の責任で選択すること)との間に見られる正の相関関係は表面的なものであり、自尊感情と共変動する本来感(個人が自分らしくあると全般的に感じている程度)の影響を統制すると、自尊感情が自律性に弱い負の影響を与えることを明らかにした。よって、本研究では負の影響とはならなかったものの、自律性に似た内面的同調には影響が見られなかったという結果になったのではと考えられる。

仮説3については、支持されなかった。本研究では、関係流動性と自尊感情の組み合わせに関わらず、それぞれが弱いながらも独立して影響を与えていることが明らかとなった。関係流動性の中でも特に「関係形成・解消の自由度」は同調行動傾向のどちらにも正の影響を与えていることが分かった。多くの研究で、閉鎖的な対人関係はあまり良いものとして捉えられておらず、それを防ぐための環境調整が必要とされている。しかし一方で吉村(2007)は、中学生にとって少人数の仲間関係も大切であり、中学生の適応感を規定する対人行動の特性として自己表現や主張性と共に、小集団閉鎖性が大切であるとしている。以上の研究を踏まえると、関係流動性と同調行動傾向を繋ぐ新たな要因が存在するのか、または、同調行動傾向の低下を考える上では友人グループの流動性は低いことが求められるのか更なる検討が必要である。

4-5. まとめと今後の課題

本研究では、青年期の中でも同調行動をとりやすいとされる中学生を対象としてその要因について明らかにすることを目的とした。その結果、環境要因と個人内要因のそれぞれが同調行動傾向、特に表面的同調に影響を与えていることが分かった。本研究においてそれらの影響力は弱い

ものではあったが、中学生の同調行動傾向において検討する際には環境要因と個人内要因の2側面から考える必要があることが示唆された。今後、実際の現場において同調行動による不適応を防止するためには、環境要因への介入も1つの方法としてその効果が期待される。個人内要因についてはその特性ゆえ介入が難しい場合が多いが、介入可能性の比較的高い環境を調整することで同調行動傾向を少しでも低下させることが出来ると考えられる。閉鎖的な関係を緩和するための環境調整を行うのか、あるいはある程度の閉鎖的な小集団を形成するための環境調整を行うのか、どのような介入を行うのが効果的であるかは本研究のみでは明らかに出来ていない。今後の課題として、関係流動性から同調行動の間にどのような認知が働いているか検討することが求められる。また、第2の課題として、本研究では対象の中学生が1つの中学校に限定されたものであったことがあげられる。そのため、本研究の結果は中学生一般のものではなく、対象中学校の中学生の特性が現れた可能性も考えらえる。結果を一般化するためには、今後は調査対象校を増やし複数の中学校からデータを得る必要があると考えられる。第3の課題としては、本研究では同調行動のネガティブな面を中心として捉え、いかに同調行動傾向を抑制するかという視点で進めてきた。気遣いの強い者ほど精神的健康の低さや対人ストレスの高さが指摘されており(橋本, 2000), そのような視点で考えると同調行動は長期的な視点で不適応だと考えられるからだ。しかし、同調行動は同質性が基盤となり求められる「Chum-group」段階において、対人関係を上手く維持していく上である程度必要な方略ともいえる。そのため、同調行動の適応・不適応レベルについて細かく検討し、不適応的な同調行動と環境要因、個人内要因との関係性を精査していくことが今後必要であると考えられる。渡邊(2016)の研究は大学生と大学院生を対象として行ったものであるが、単位制による授業の形態やサークル、バイトなど比較的自由度の高い大学生と比較すると、自由度の少ない中学生時期の学校内におけるコミュニティは少なく、改めて中学生を取り巻く環境を考えることは非常に重要であると考えられる。

【引用文献】

- 土井隆義 (2008). 友だち地獄 ―「空気を読む」世代のサバイバル― 筑摩書房
- 橋本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化―友人関係における活動・感情・欲求と適応― 風間書房
- 橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- Hashimoto, H. & Yamagishi, T.(2015). Preference-expectation reversal in the ratings of independent and interdependent individuals: A USA-Japan comparison. *Asian Journal of Social Psychology*, 18, 115-123.
- 本田優子・梶原まどか・堀川ひかり・森恵美加・一期崎直美 (2013). 中学生がとる同調行動と対人恐怖心性との関連 熊本大学教育学部紀要 62, 239-251.
- 保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討―ある事例を通して― 心理臨床学研究 4(1), 15-26.
- 保坂亨 (2000). 学校を欠席する子どもたち―長期欠席・不登校から学校教育を考える― 東京大学出版会
- 藤原正光 (2006). 同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み (1)―大学生による小5時代の回想から― 文教大学教育学部教育学部紀要 40, 1-9.
- 福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林渚・古川善也・森永康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーク

- 自尊感情尺度の2側面：「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」— 教育心理学研究, 65(2), 183-196.
- 福留広大・森永康子 (2018). 自己評価の尺度における肯定的・否定的項目群因子の年齢別の分析—ローゼンバーグ自尊感情尺度と特性的自己効力感尺度— 教育心理学研究 66(30), 212-224.
- 古荘純一 (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか：児童精神科医の現場報告 光文社
- 五十嵐茉莉・廣原紀恵 (2016). 中・高校生の友人グループに対する価値観について—養護教諭の健康相談活動の一助として— 茨城大学教育学部紀要, 65, 323-334.
- 石田靖彦・丹村明寿香 (2012). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範意識と逸脱行為に及ぼす影響. 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 61, 17-125.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応及び学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 2, 125-133.
- 石津憲一郎 (2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 岩宮恵子 (2012). 「ほっち」恐怖と「イツメン」希求 現代思春期・青年期論 精神療法 38(2), 233-235. 金剛出版
- 葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成— 鳴門教育大学研究紀要 25, 189-203.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 (2018). 思春期になぜ自尊感情が下がるのか？—批判的思考態度との関係から— 青年心理学研究, 30, 25-40.
- 小松亜紀子 (2005). 自己認識が流行志向に及ぼす影響—製品スタイル選択における「自分らしさ」の判断基準とトレンドの関連 デザイン研究 52 (5), 21-2
- 高坂康雅 (2009). 青年期における内省への取り組み方の発達の变化と劣等感との関連 青年心理学研究, 21, 83-94.
- 益子洋人 (2009). 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、不登校傾向との関連—高等学校2校の調査から— 学校メンタルヘルス, 12(1), 69-76.
- 益子洋人 (2013). 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連—過剰適応を「関係維持・対立回避の行動」と本来感から捉えて— 教育心理学研究, 61, 133-145.
- 餅川正雄 (2011). 学校のいじめ問題に関する研究 (Ⅲ) 広島経済大学研究論集 34 (1), 51-70.
- 村瀬孝雄 (1995). アイデンティティ論考：青年期における自己確立を中心に 誠信書房
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究 53, 307-319.
- Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 坂本剛 (1999). 中学生の学級集団における同調高度と適応についての一研究 名古屋大学教育学部紀要 46, 205-216.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 田島祐奈・山崎洋史・岩瀧大樹 (2015). 青年期における対人欲求及び同調行動に関する研究 学苑, 892, 105-111.
- 戸川行男 (1956). 適応と欲求 金子書房
- 塚本貴文・濱口佳和 (2003). 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響：中学生の場合 筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 45-55.
- 山田有莉 (2017). 親密確認活動におけるおそろい行動—被異質視不安と自尊感情との関連— 金城学院大学大学院人間科学研究科 17, 9-20.

吉村 齊 (2007). 中学生の適応感を規定する要因としての対人行動とその性差. 心理学研究, 78(3), 290-296.

Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. CERSS Working Paper 75, Center for Experimental Research in Social Sciences. Hokkaido University.

渡邊 楓 (2016). 関係性流動が青年期の対人関係における過剰適応に与える影響—性格特性からの影響と比較して— 日本女子大学大学院修士論文